巻頭言
Kan・Tou・Gen

『自然の保全とは？』

財団法人滋賀県勤労者福祉協会 事務局長
松 井 佐 彦（財団法人淡海環境保全財団前理事）

私は、淡海環境保全財団が設立され、琵琶湖の環境に関わる事業を開始したきっかけの一つに、滋賀県がヨシ群落の保全条例を制定してヨシの保全事業に取り組むこととなったことと、具体的な事業体制を敷くことが必要になったことがあったと考えています。縁あって財団の設立から理事として昨年まで運営にも参画させていただきましたが、ヨシ群落からは「自然とは」「保全とは」をいくつも問いかけられた気がします。

一、どちらが自然保全？

ヨシ群落の手入れをしないで放置しておくと、秋に枯れたヨシが倒れ翌春に芽吹くことを繰返してヨシ群落は陸地化し、ヨシは次の浅瀬に群落を増やしていく、つまり自然の営みで言えばヨシは干陸化の象徴だと言われる人があります。

スウェーデンの湖を訪ねたときに、先方の研究者はヨシ群落の面積や水質浄化に関するデータを示してくれましたが、ヨシの手入れについて質問すると怪訝な顔をして「何もしてない。放牧している牛などが湖辺のヨシを食べているが他は自然に伸び自然に枯れている」と答えました。

自然に任せれば当然に波などに洗われて群落が衰退することもあり、ドイツ・ベルリンでは群落を保護する消波柵を設け、波を起こす原因である船舶やモーターボートの速度制限・航行規制を行っていました。滋賀県でもヨシの植栽と定着に苦心しています。

二、ヨシ群落の手入れ

葦簾や葦戸をはじめとする工芸品を生産される業者は、良いヨシを育てるヨシ田を持っておられて、秋に枯れたヨシを刈り取り、冬に焼き払って春の芽吹きを促すという手入れを怠りなくされています。湖辺の自然のヨシも同じ手法でヨシの生育を促しているわけです。しかし、魚類や鳥類の住処としてのヨシを考えると、自然に繁茂した場所が必要です。

「全部を刈って焼き払ったら鳥や魚の住処がなくなる」との質問を受けて、県部長が「虎刈りにします。」と答えた迷答弁が印象に残っています。

三、水質浄化

ヨシ群落が琵琶湖の水質浄化に大きな役割を果たすとされています。確かにヨシ群落が水中の窒素やリンを吸収して水質浄化を果たす機能はもっていますが、琵琶湖の総面積六七〇平方キロメートルに比して、現存するヨシ群落は僅か一三〇ヘクタールに過ぎず、ヨシ群落に琵琶湖の水質浄化まで期待するのは無理に思えます。

しかしながら、ヨシ群落の保全運動は琵琶湖の環境保全運動と一つのシンボル的な運動となっています。淡海環境保全財団は、その名称のとおり、万葉の昔から琵琶湖の原風景を取り戻そうという多くの人々と想いを共有しています。自然保護や環境学習、ボランティア活動の啓発、資源としての活用など、ヨシ保全運動が幅広い自然とのかかわりに発展していくことを願う次第です。